

リレーインタビュー 矢板の未来を紡ぐ

矢板市女性団体連絡協議会
会長
坪内智子さん



「和服を着て幼稚園のPTAに出ると、暇に見えたんでしょうね。何か役をやってくださいと言われ、つい、ハイと言ってしまいました。神戸で生まれ育ち、実社会に出ないまま結婚して3年目に矢板に転居、そんな私の社会性はPTAではぐまれました」とおっしゃる坪内さん。矢板に暮らして30年。持って生まれた明るさとポジティブ思考で、様々な人との出会いを糧に学び続けている姿を見て、前号に登場した坪山岩男さんが紹介してくださいました。

望まれていると考えるとき……

過日、宇都宮大学の広瀬先生の講座で、「この講座に、嫌々参加されている方もいるかもしれないませんが、何事も嫌々やる」と進みません。少し考え方を改めて、私は望まれてここに参加しているのだと思っただけで思考が違ってくるでしょうか？」と言われました。

女性団体連絡協議会の会長になって、いろいろな会議に出席しなければならなくなり、少し気が重いこともありましたが、その話を聞いてからは、「つまらない会議はない、自分がつまらなくしているだけ」と思えるようになり、世の中のいろいろなことが同じだと気づきました。

楽しむために、「ついで」をつくる

それからは、「がんばらないで、努力しよう。せっかくなら楽しく」と考えるようになり、研究会などの企画のときは、目的の場所のほかに芸術鑑賞・見学施設、何かおいしい物を食べる場所を事前に調べ、「ついで」を作っておかせるようにしました。ちょっとした楽しみを作ることです。皆さんが楽しく参加できるようにになり、人との「和」もこのようなところから生まれるのだと思います。案外見落としがちなことではないでしょうか。

多様性を尊重できるボランティア活動を！ ボランティア活動を！ 今、やしお苑で、喫茶と生け花のボランティアをしています。そこで

出会う高齢者の方は本当にいろいろな個性を持っています。それをきちんと受け止めることがとても大切です。ボランティア活動であっても、これからは「く」してあげてい

る」という考えから抜け出し、多様性を尊重したやり方を、具体的に考えていくことが必要だと思えます。

市民力は、まず不公平感を無くす事から市民力を発揮してもらうという事は、市民と行政の協働のまちづくりをしましょうということ。でも、その前に解決しなければならぬことがあると思います。例えば、公民館主催の教室に参加しようと思っ

市民力は人と人のつながりの中から・優しさ、思いやり、いたわりのコミュニティーづくりを

員になりました」と言っただけで、ケアのされ方は一人一人微妙に違うやり方を求めているということ。介護は、措置時代から契約時代への流れになってきています。二〇〇七年から二〇一五年には高齢者が急増しますが、その世代はさまざまな個性を持ち、はつきりと意思表示もします。負担に見合ったものが得られないと、文句も出ます。よりよいサービスを受けたいと思つた時は、自分たちで負担しなければなりません。そして、個人のニーズにきめ細かく対応したデザインをつくらなければなりません。

プランからデザインへ 例えば家を建てる時、今までは個人の資産を考え、まずお金の返済計画をたて、次にどんな家を建てるかのアイデアを専門的な知識を持つ人から頂くというプラン重視の考え方でし

た。しかし、今は徐々に楽しい生活をするためにどんなことが必要かという事を、個人が追求していくやり方に変わってきています。つまり、デザインが先になり、プランはその後にくるようになってきました。これを介護に当てはめると、一斉にケアするほうが楽で

すが、介護される側に立つと、ケアのされ方は一人一人微妙に違うやり方を求めているということ。介護は、措置時代から契約時代への流れになってきています。二〇〇七年から二〇一五年には高齢者が急増しますが、その世代はさまざまな個性を持ち、はつきりと意思表示もします。負担に見合ったものが得られないと、文句も出ます。よりよいサービスを受けたいと思つた時は、自分たちで負担しなければなりません。そして、個人のニーズにきめ細かく対応したデザインをつくらなければなりません。

知人から、介護される人の自立支援に力点を置く「アクティブティ デイレクター」のケアという考え方があることを聞いて興味を持ち、勉強を始めたところ。介護する方もされる方も人間の尊厳を考え、幸せを感じることでできるボランティア活動のやり方があるかもしれないと思えてきました。

次世代育成のための包括支援センターを 高齢者の方だけでなく、若い子育て中のお母さんたちと話す、本当にいろいろな悩みを抱えているのが

わかります。しかし問題はSOSを発信できないお母さんです。発信してもらわなければ、受信しようがないし、手の貸しようもありません。そのことを考えると、どうしても行政の力が必要になってくると思います。例えば、高齢者福祉と同じように、若い人たちをバックアップするための包括支援センターを作り、市民と協働で目の前の現実に対応する必要があるのではないかと思います。

自分らしく生きるとは自己選択するということ 私は、エンディングノートをつけたり、母親の成年後見制度の取得をしたり、自分の「葬送の曲」を決めて子どもに託したりしています。自分らしく人生を全うするためには、自己選択できる器をたくさん作って自己決定していくことが大事だと思つています。五年前に膠原（こうげん）病を

発症し、物を見る目も不確かだ。無病息災ではなく、病を乗り越えました。しかし、好奇心旺盛な心の目と耳と口で、今のこの時より一日、一時間、一歩前をゆっくり各駅停車をしながら、定年で距離感の近くなった夫とともに、ポジティブ思考で歩んでいきたいと思えます。